

m の免震層を介在させた場合の $K_{seg}/K_{jt}=3.43$ のケースについて、その免震効果を定性的及び定量的に示す。

図-3は地盤のせん断波速度 $V_s=300\text{m/sec}$ 、単位体積重量 $\gamma_t=2\text{tf/m}^3$ について、せん断弾性係数 $G_g=5\text{kgf/cm}^2$ の免震層を介在させた場合(a)とさせない場合(b)の変形の比較を行ったものである。免震層がある場合には、あたかもトンネルがないかのように地盤は一樣に近い伸びを示しており、トンネルの変形量はごくわずかなのに対して、免震層がない場合には、地盤とトンネルの相互作用によって、トンネル近傍では地盤に引張られる様にトンネルが変形していることが分る。免震層がある場合、地盤の変形を免震層が吸収することにより、トンネルの軸方向の変形量は、著しく低減していることが分る。

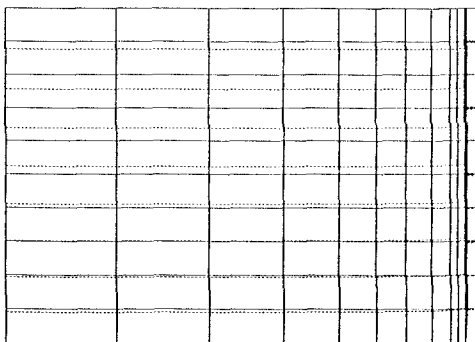
次にセグメント本体部に発生するひずみに関して、免震層がある場合とない場合についての解析結果を図-4を用いて比較する。縦軸は免震層がある場合とない場合のセグメント本体部のひずみの比率 $\epsilon_{t1}/\epsilon_{t2}$ (ひずみ低減率)を示し、横軸は地盤のせん断波速度を示す。また免震層のせん断弾性係数 G_g としては、2.5, 5, 10, 15, 30 kgf/cm^2 の5種類について解析を行った。図に示すように G_g が小さくなるほど、また地盤の剛性が高くなるほど免震層によるセグメントひずみ低減効果が大きくなっていることが分る。この図から免震層による免震効果が定量的に示された。

本免震層には、この他にもう一つの効果がある。今回の解析で使用した免震層のせん断弾性係数 G_g の範囲では、 D_{jt}/D_{seg} の値が K_{seg}/K_{jt} の値にほぼ一致している。このことは図-2に示した等価剛性算定法に関する不合理が排除され、シールドトンネルの等価剛性をセグメントと継手部の直列バネによって一義的に与えることができることを示している³⁾。

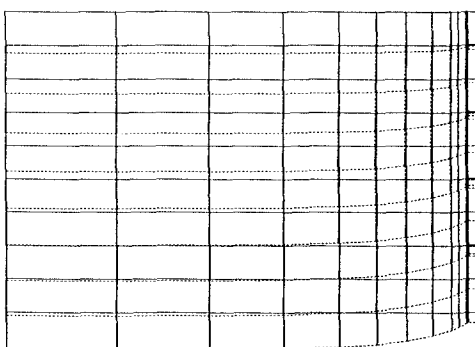
4. まとめ 本研究から、まず3次元FEM解析によりシールドトンネルの地震時の変形メカニズムをシミュレートする手法を示し、さらにこの手法で免震層がある場合とない場合についての変形の相違を定性的に明らかにした。そしてこれらを整理して免震層介在による免震効果、すなわちセグメント本体部の軸ひずみ低減効果及び継手による変位吸収効果を定量的に示した。

5. 参考文献

- 1) 鈴木猛康、田村重四郎：周辺地盤を考慮したシールドトンネルの等価剛性、第43回土木学会年次学術講演会、第一部、1988, pp.1160-1161、
- 2) 鈴木猛康：シールドトンネルの免震構造に関する模型振動実験、第20回地震工学研究発表会、1989, pp.565-568、
- 3) 鈴木猛康、宇波邦宣：シールドトンネルの免震構造に関する研究(その2) — 地盤応答解析への適用 —、第45回土木学会年次学術講演会、第一部、1990



(a) 免震層を介在させる場合



(b) 免震層を介在させない場合
図-3 地盤～トンネル系の変形

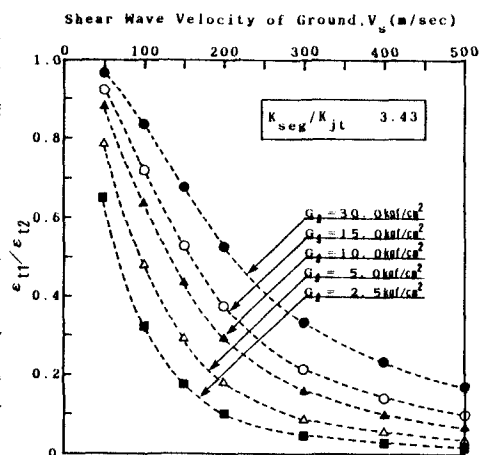


図-4 免震層のよるひずみ低減効果